

人民の幸福のために

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

人民の幸福のために

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
2025

まえがき

偉大な指導者金正日（キムジョンイル）国防委員長は、革命を指導する全期間、常に人民の幸せから人生の喜びと自負を覚え、現地指導の道を歩み続けた。

全国各地を訪ね続けた国防委員長の現地指導は、人民のための愛の道、献身の道であった。

敬愛する金正恩（キムジョンウン）総書記は、金正日同志の愛国の心は常に人民という二文字でいっぱいだったと言った。

本書は、いつもあらゆる思索と実践の真っ先に人民を立て、人民のために全てを尽くした金正日国防委員長の為民献身の日々のエピソードの中で一部を紹介している。

目　次

大衆の中に入ろう

1964年6月のある日、一幹部は朝から電話をかけていた。

ふと、人の気配を感じて振り返った彼は、がばっと椅子から立ち上がった。

金正日国防委員長が彼の電話が終わるのを待っていたのである。

そんな彼を座らせて電話を続けるようにと言い、机の上に積んである文書を黙って眺めていた国防委員長が聞いた。

「この頃、順安(スンアン)や三石(サムソク)の方へ行ってみたんですか」

行ってみたことがないという彼の答えに、国防委員長はこのように言った。

——ともあれ、一度行ってみるのがよかったろうに。この頃、バスや列車に乗るのが容易なことではなく、食堂にも人々が多くて困るという苦情があるが、このように電話や文書だけでは実態が把握できない。

大衆の中に入るのが肝心である。そうしてこそ、大衆の要求と志向を把握し、彼らの生活上の要求を適時

に解決することができる。わが党の重要な使命は、人民大衆の要求と志向を反映して適時に正しい路線と政策を樹立し、それを貫徹するための闘争へ大衆を奮い立たせることである。わが党が正しい路線と政策を立てるためには、まず人民大衆の要求と悩みが何であるかをよく知らなければならない。そのためには、党活動家が大衆の中に入るべきである。……

国防委員長の指摘に、その幹部はうなだれ、自分の活動態度を深刻に反省した。

国防委員長は、彼の心中を察したかのように微笑を浮かべ、党活動家が模範を示すなら下の者も見習うだろう、大衆の中に入ることで模範を示すのだ、と言った。

「分かりました。今後、しっかりやります」

彼はその後、国防委員長の言葉通り、大衆の中に入って実態を把握する過程でバスと列車、食堂の問題だけでなく、首都に遊園地が足りないということにも気がついた。

後日、彼の報告を受けた国防委員長は、今になってあなたたちの大衆観点が確立したようだとし、次のように言った。

——事務室に座っていては、大衆のそのような声が聞こえません。

どうです。われわれが青年公園や大城山（テソンサン）遊園地を建設したとしても、それだけでは足りないじゃありませんか。また、食堂も足りなく、列車やバスも不足しています。それは何を意味しますか。幹部が党性、階級性、人民性に欠けているという批判でもあります。……

人民の目は正しいものです。

だから、われわれは大衆の声に耳を傾けるべきです。

大衆の中に入りましょう。

生まれ変わった民俗舞踊

1970年3月、金正日国防委員長は平壌（ピョンヤン）大劇場で3・8国際婦人デーに際して行われる音楽舞踊総合公演の準備を指導した。

しばらく公演プログラムに目を凝らしていた国防委員長は、今回の慶祝公演に「社党舞」を入れてほしいという意見が出されたが、どう思っているのかと尋ねた。

一幹部がその踊りは過去に寺院で踊られたものなので演目に入れなかったと答えた。

彼はその理由を説明しながらも、国防委員長がそんな踊りにまで関心を向けていることに驚きを隠しきれなかったし、それは他の幹部たちも同じだった。

静かに笑みを浮かべていた国防委員長は、この踊りについて思い違っているようだとして、「社党舞」について具体的に説明した。

その踊りにはこんないわれが秘められていた。

朝鮮の封建時代、国の各地を歩き回りながら、歌舞で生計を立てる人々がいたが、彼らを「社党」と呼んだ。彼らは、祝日の遊び場や人々が多く集まる場所で踊ったが、それは一般的にその場所や遊びの雰囲気に合わせ、即興的でありながらも巧みな動作で織り成された踊りだった。昔の「社党舞」は、明確な思想・主題の内容と形式がなく、ただそのときどきの遊びに過ぎない踊りであったが、それには、わが人民の素朴ながらも特色のある踊りのリズムと民族的な興趣がかなり反映されていた。

幹部たちは驚かざるを得なかった。それまで彼らは「社党」という言葉を間違って理解していた。

国防委員長は、うなだれている幹部と創作家たちの心を和らげるように、どうしてもそう感じられるなら、この踊りを「社党舞」と言わず、「三人舞」と呼ぶことに

しようと言った。
「三人舞」の公演順序を定め、出演する俳優についても確かめた国防委員長は、今回の公演は平壌市内に滞在する外国人も観覧するから、高い水準で行うべきだと強調した。
そうして、消え去るところだった民俗舞踊「社党舞」は「三人舞」に生まれ変わり、民族の優秀性を広く示すようになった。

自ら田植えをして

1971年5月、金正日国防委員長は青山（チョンサン）里に出向いた。
脱穀場の前に立って田畑を眺めている国防委員長のところに数人の芸能人が駆けてきた。
ところが、彼らは泥水まみれの自分らの服装を見てまごまごした。
すると国防委員長は、農作業をしているあなたたちに会いに来たのに、手が汚れたからといって握手ができないわけはない、私は俳優に会うためではなく、あなたたちの泥のついた手を握ってみたくてやって来たのだ、と

言って、彼ら一人一人と握手をした。
そして、病人はいないのか、みんな意気軒昂として働いているのを見ると、本当にうれしい、俳優たちの働く田畑に行ってみよう、と言い、先頭に立って歩き出した。
やがて国防委員長は、農村支援に来た芸能人たちが田植えをするところに至った。
あちこちから芸能人たちが駆けて来て、国防委員長にあいさつをした。
国防委員長は、みんなご苦労さんと言い、彼ら一人一人の手を取った。
国防委員長は、泥のついた顔を見せるのが恥ずかしくて他人の後ろに隠れる俳優を見て笑いながら、自身は舞台の上で扮装した人々を見ようと来たのではなく、田畑で働く皆さんに会うために来たのだと言った。
そして、その俳優の手を引いて握手し、相次いで駆けつけて来た俳優たちともあいさつを交わした。
やがて稲の苗束を手にした国防委員長は、農村に出たからには田植えをしてみようと言い、膝までつかる水田に入った。
「おやっ?!……」
国防委員長が田植えまでするとは思いも寄らなかった

芸能人と幹部たちは、なすすべを知らずうろたえた。

しかし、国防委員長は腰を屈め、田植えをしはじめた。

しばらくして、一幹部が国防委員長にそれくらいなら十分ではないかと進言した。

しかし、国防委員長は「手にある苗束をそのまま水田に置くわけにはいかない」と言い、田植えを続けた。

問題解決の鍵

1975年の初め、朝鮮職業総同盟(職総)中央委員会の幹部たちは集団的討議を繰り返して、朝鮮労働党創立30周年を迎えて行うべき活動計画を立てた。

活動計画はそれくらいなら申し分ないと思われたが、彼らは、新年の活動方向を金正日国防委員長に見せて指導を受けたかった。

彼らの願いを推し量った国防委員長は1975年1月、職総の一女性幹部に会った。

国防委員長は、労働者階級の代表が時間を少し割いてもらいたいと言っているのに、それに応じないわけにはいかない、おそらく労働者階級のためにまた何かよい仕事を

計画したようだが、早く話を聞いてみようと促した。

計画の内容を注意深く聞いた国防委員長は、今回職総が計画した仕事は全て結構だとして、次のように尋ねた。

「ところで、この計画を労働者たちと討議してみましたか」

予想外の質問に幹部の顔はこわばった。職総では、国防委員長が結論を下せば、そのまま実行する計画だったのである。

国防委員長は、それは適切だとは言えないとし、次のような話を聞かせた。

——農村で稲が実る頃に倒伏する現象がしばしば現れたことがあった。

金日成(キムイルソン)同志は農業部門の幹部と科学者に、この問題を究明して対策を講じるよう課題を与えた。しかし、この問題は容易に解決されず、年が替わっても繰り返された。一部の幹部は、稲が実ると稲株の上部に重みがかかり、そんなときに風雨にさらされれば稲の倒伏は避けがたいと思っていた。

汗水流して丹念に育ててきた穀物の実がほとんど熟したのに、それを台無しにしてしまうとは残念なことであった。

金日成同志はこの問題一つを解決するためにも農村の道をたゆみなく歩み続けた。平野部の田にも足を運び、中間部、山間部の棚田も見て回り、早期に田植えを終えた田にも関心を寄せ、最後に田植えをした苗床の跡の作柄も確かめた。堆肥や肥料を施した状況も確かめ、前年と当年の気象条件も比べてみた。

その日々、金日成同志は農業科学者はもちろん、協同農場の技術者、作業班長、分組長、はては用水管理工に至るまで多くの人々に会って話を聞くことを鉄則としていた。

この過程で金日成同志は、平凡な農民たちの話から一つの問題点を見つけ出したが、稲の倒伏した所はいずれも窒素肥料を施し過ぎた水田だということであった。例えば、苗床は粘土質の場所に定めるが、もとよりそこには窒素成分が多い。そこに基肥をたくさん施し、その上に窒素肥料まで施したのだから、悪い結果になるのは当たり前だった。結局、稲の倒伏する原因はここにあった。……

国防委員長は話を終えてこう言った。

——どうですか。問題解決のカギは大衆の中にあります。

あなたたちが立てたこの計画を持って労働者階級の中に入って意見を聞いてみなさい。

労働者階級の意向はすなわちわが党の意図であり、朝鮮革命の要求です。

言い換えれば、わが党は労働者階級の意向通りに活動する党です。

香水噴霧器

蒼光院（チャングァン）の建設が最終段階に至っていた1979年9月のある日。

建設場を訪れて蒼光院の建物を眺めていた金正日国防委員長は、今、蒼光院を建設していることを人民が喜んでいるのかと尋ねた。

幹部から人民がたいへん喜び、多くの人々が蒼光院建設場に志願して働いているという報告を受けた国防委員長は、満足した表情で、多分人民が喜ぶだろうと言った。

1階の廊下で各種の図面と仕上げ資材の見本を見た国防委員長は、蒼光院に香水噴霧器を設置すべきだと言った。

（香水噴霧器？）

初めて聞く言葉だった。

国防委員長は、蒼光院に香水噴霧器を設置すれば、理髪や入浴を終えた人々が香水をつけることができると言って、こう続けた。

「私が以前、ソ連へ行ったとき、一人の老人がある器械にコインを入れていたので行ってみると、香水をつけていました。ソ連の人たちが香水噴霧器をよくつくりました」

あのとき、国防委員長はわが人民もかぐわしい香水を思う存分つけられるようにすべきだと考えたのである。

続けて、蒼光院に香水噴霧器を設置すれば、人民が喜ぶでしょう、と顔色を輝かせて語った。

こうして、蒼光院には香水噴霧器が設置されるようになった。

否決された設計

1980年1月のある日、金正日国防委員長は幹部たちに、平壌にアイススケートリンクを建設する課題を与え

ながらこう言った。

「今後、平壌にアイススケートリンクまで建設すれば、金日成同志が指示した対象を全て建設することになります。

平壌に建設するアイススケートリンクは、国際競技もできるように立派に建てなければなりません。

アイススケートリンクは屋根を葺いて、四季を通じて利用できるようにすべきです。アイススケートリンクは、サッカー競技場よりは小さくしながらも、ホッケーやフィギュアもできるようにすべきです」

国防委員長の意図を体した設計家たちは、独特な様式の設計図を作成した。

ある日、設計図を見た国防委員長は、なぜ6月から10月までは運営しないことにしたのかと尋ねた。

幹部たちは、夏季に暑くなった室内空気を冷やすためには、製氷のための冷凍設備よりも値段の高い冷却設備が必要なので、やむを得ず暑い季節にはアイススケートリンクを運営しないことにしたと答えた。

国防委員長は、1年に5カ月間も運営できないならアイススケートリンクを建設する意味がなくなる、必要な冷却設備を全て解決してやるから、年中アイススケートリンク

を運営できるように設計をやり直すようにと言った。

国防委員長は、室内の汚染した空気を人工的に入れ換える設備が予定されていないことも知ってこう続けた。

——競技場内に汚染した空気が少しでも残っていてはいけない。室内の空気を全部入れ換えるべきだ。資本家には工事費、運営費が問題であろうが、人民のためのわれわれの建設事業では金が問題ではない。人民的な観点に立って、設計を作成し直すべきである。……

結局、アイススケートリンクの設計は否決された。

その後、四季を通じて運営されながらも、常に新鮮な空気が満ち溢れるようアイススケートリンクの設計が作成し直された。

清流館を訪れて

1981年11月、開館の準備を進めている清流館（チョンリュ）を訪れた金正日国防委員長は、家族食事室に足を向けた。

1号室の出入り口に立った国防委員長は、食膳をよく作った、家族が利用する部屋なので、朝鮮式食膳を置いたのがよい、食膳の高さはどうなのか座ってみるようにと言った。

一幹部を食膳の前に座らせた国防委員長は、彼の座ったときの背丈と食膳の高さを詳しく比べてみてこう言った。

——お膳がちょっと高いようです。ここは家族が食事する部屋だということを考慮しなければなりません。

あの食膳は大人にはかまいませんが、子どもには非常に不便でしょう。家族が集まって楽しい気持ちで食事をしなければならないのに、子どもが不便な思いをすると親の心がどうでしょうか。食膳は子どもに合わせて少し低くするのがよいでしょう。

確かに高いです。そこに料理の器まで置いたときを考えてみるべきです。

清流館の2階に上がって食事室をいちいち見て歩いていた国防委員長は、食堂の運営を始めると一日に何人ぐらい収容できるのかと尋ねた。

幹部の答えを聞いた国防委員長は、一度の食事時間をどのぐらいに計算したかとまた尋ねた。

「40分です」

しばらく思いにふけっていた国防委員長は、40分なら短過ぎると言った。

幹部たちは顔を見合わせた。

あまり長過ぎると言われるのではと思っていたからである。

実際、一度の食事時間を定めるとき、ある人は30分、またある人はそれでも食事を楽しむには40分はかかるだろうと言った。それ以上の時間を言い出す人がいないので、一度の食事時間を40分に定めたのである。

国防委員長は幹部たちを諭すかのように、家にお客が来たり、友人に会ったときに清流館に来て食事をするだけで別れるのは残念なことだ、話を交わしながら印象深い時間を過ごすべきではないか、自分の考えでは1時間も足りなさそうだと言ってこう続けた。

――われわれが金儲けをしようと巨額の資金や資材を投じてこのように立派な食堂を建てたのではない。人民が好きな料理を思う存分食べながら、楽しく休息するようにさせるためだ。食事時間の計算をやり直して食堂の運営を着実に行うべきだ。

こうして、清流館での一度の食事時間は40分からもっと長くなった。

宴会場の新しい主人

1990年7月、咸鏡（ハムギョン）南道に対する現地指導中の金正日国防委員長が新興（シンフン）館を訪れたときのことである。

幹部たちとあいさつを交わした国防委員長は、昔は新興館のクッス（麺）が評判だったが、この頃はどうなのか、人民にどのようにサービスするのか「検閲」しに来たと言って豪快に笑った。

新興館の各部屋を見て回り、道自体で建設した新興館の宴会場に至った国防委員長は内部に目を凝らし、幹部たちにこの宴会場は玉流（オンリュ）館の宴会場より大きいのではないかと尋ね、意味のある微笑を浮かべた。

そして、咸鏡南道の人々は絶対に他の道には負けようとはしないはずだ、咸興（ハムフン）大劇場だけ見ても平壌大劇場につぐ大きな建物だと笑って言った。

国防委員長は、咸鏡南道にこんな素晴らしい宴会場があるのは結構なことだと再び満足した。

そして新興館の女性幹部に、宴会場をどんなふうに利用しているのかと尋ねた。

「国家的な重要行事や道内の重要行事がある場合に利用しています」

しばらくして国防委員長は、次のように言った。

「新興館にある大きな宴会場を咸興市民が常に利用できるようにすべきです。今、この宴会場を道で宴会などを催すときにしか利用していないそうですが、そんな必要はありません。

大きな宴会場は、道で宴会や対外行事を催すときにも利用し、食卓をたくさん置いて一般市民が定期的にクッスを食べられるようにすべきです」

そして、素晴らしい宴会場を整えておいて利用しないのは無意味なことだ、宴会場を空けておくよりは、勤労者に広く利用させるのが望ましいことだ、と言った。

実際、宴会場を整えながらも、それを一般客に利用させることは少しも考えていなかった。

国防委員長は、今、玉流館の宴会場も平壌市民が毎日利用している、ここも人民のために開放しよう、われわれの社会では人民が当然、このような宴会場を利用すべきだ、と言った。

そして、大勢の人々に宴会場を利用させるには照明問題やエアコン問題を解決すべきだとし、その対策まで立てた。

新興館を後にしながら国防委員長は、新興館の幹部に、今後も仕事に精を出して新興館をより立派に整え、料理の質も一層高めるべきだとし、今度、新興館にまた来るという約束を残した。

生徒と一緒に過ごした正月

1997年の元旦、金正日国防委員長はみぞれに打たれながら万景台(マンギョンデ)革命学院を訪れた。

赤いネクタイを結んであげる生徒の背を叩いてくれた国防委員長は、学院の教室や寝室、食堂などをくまなく見て回った。

食堂では生徒たちの正月の昼食のお膳をつぶさに確かめ、寝室に行ってはベッドの柔らかさの具合を確かめようと自ら座ってみもした。

生徒たちが準備した公演を観ながらも、しばしばハンカチで目頭を押さえた。

公演が終わると、舞台の生徒たちが駆けて来て「お父

さん！」「お父さん！」と呼びながら国防委員長の懐に抱かれ、腕にとりすがって写真を撮っていただきたいと甘えた。

「うん、撮ろう」

国防委員長は幹部たちに、こんなに寒い日に写真が撮れるのか、春に来て撮ったらどうかと聞いた。

学院の責任幹部が生徒たちの一様な願いであると答えると、国防委員長は撮影台の方へ目をやって、もうみんな整列している、それなら今日も撮り、次の機会にまた撮ろうと言い、生徒たちと一緒に記念写真を撮った。

金正日国防委員長が帰った数時間後、学院は再び感激の波で沸き立った。

国防委員長が数台の自動車分のキジ肉や菓子類、そして学用品、スポーツ文化用品を贈ってくださったのである。

人民に喜ばれるもの

1997年3月のある日の午後。

中央動物園を訪れて猛獣舎と馬舎を見て回った金正日国防委員長は、鳥類舎へ足を向けた。

鳥類舎では、ハゲワシやイヌワシが大きな翼を広げて羽ばたいていた。

国防委員長は、ここのハゲワシとイヌワシは軍人たちが孟山（メンサン）一帯で捕ったものを自身が動物園に贈るようにしたと振り返りながら、ハゲワシとイヌワシは体が大きい上に見た目にも勇猛らしいと言った。

そして話題を変えて、動物園を訪れる人々にどんな動物が一番喜ばれるのかと尋ねた。

幹部の答えを聞いた国防委員長は、動物園を訪れる人民の幸せな姿を思い描くかのように満足な顔色で、中央動物園を訪れる人々が自身の贈った馬が動物園の構内を走るのを見て一番喜び、諸品種の愛玩犬や猟犬が一番喜ばれるのは結構なことだ、動物園は人民のための場所だから、人民が喜ぶ動物をたくさん飼育すべきだ、と言った。

そして、自身は珍しい犬品種をはじめ新しい動物が手に入ると中央動物園に贈っていると言った。

「金正日将軍が贈ってくださったポニーが子を産みました。その馬が引く花馬車に子どもたちを乗せて動物園の構内を走り回ると、非常に喜んでいます」

国防委員長は再び満足を示し、中央動物園で子どもた

ちをポニーの引く花馬車に乗せて構内を走り回るのはよいことだと言った。

ドングリのムク

1998年10月のある日、幹部たちと話を交わしていた金正日国防委員長は、ふと人民の食糧事情について尋ねた。

幹部たちは、自分らが仕事を満足にできなくて人民が食生活で苦労しているという自責に駆られ、すぐに答えられずうなだれていた。

国防委員長の催促に、一人の幹部が戸惑いながら、国の食糧事情が困難なため一部の人はドングリのムク(ドングリで作ったところてん)で食事に代えていると答えた。

しばらく考えていた国防委員長は幹部たちを見回し、われわれも今日の昼食はドングリのムクにしようと言った。

幹部たちはあわてて答えた。

「それだけは絶対にいけません。人民が知ったら、私

たちを承知しないでしょう。なんとかそれだけは……」

国防委員長は微笑を浮かべて、結構です、人民が食べるものは全部食べてみなければなりませんと言い、昼食にドングリのムクを用意するよう念を押した。

やがて、国防委員長と随員らの食卓にドングリのムクが上がった。

国防委員長は、先日の現地指導のときにはトウモロコシ粉で作ったクァベギ（ドーナツに似たもの）を食べ、今日は皆さんと一緒にドングリのムクを食べていると言いながら箸を取った。

そして、今、わが人民は何年もの間食糧が足りなくていろいろな食べ物を作って食糧にしている、人民の生活を知り、人民の気持ちを理解し、人民に忠実に仕えるためには、幹部が常に人民の中に深く入って彼らが食べるものも食べ、苦楽を共にすべきだと言ってこう続けた。

「この世にまたとない人民運に恵まれたわれわれは、今日のように強行軍をする困難なときほど、人民の上に君臨するのではなく、人民に忠実に奉仕する忠僕にならなければなりません」

慈しみ深い恩情

1999年9月のある日、現地指導中の金正日国防委員長は、慈江(チャガン)道の模範的な女性幹部たちに会った。

「今日、慈江道に来た機会に、仕事熱心な女性幹部たちと食事でも一緒にしたいと思って、皆さんを呼びました」

そして、会議や出張のため平壌に上がった際、玉流館の冷麺を味わってみたはずだろうが、それでも皆さんに冷麺をもてなしたくて簡素に用意させたと言った。

彼女らは約束でもしたように口をそろえて、国防委員長に感謝のあいさつをささげた。

国防委員長は、ありがとう、ありがとう、と答え、どうぞ食卓に着いて食事をしようと言った。

彼女らが目に涙をたたえてそのまま座っていると、国防委員長は、どうして箸を取らないのか、あなたたちが早く食べないと私も食べることができない、と彼女たちの気持ちを和らげ、料理の皿を彼女らの近くに押しやった。

この日国防委員長は、女性幹部らのために自ら用意してきた服地を与え、祝杯を勧めてから、彼女たちと一緒に平壌冷麺を食した。

かまどを分けた娘たちが久し振りに実家の親元に戻ってきたような、なごやかな雰囲気の中で時間がかなり流れた。

女性幹部らの善行と活動の成果を褒めたたえていた国防委員長は、江界ぶどう酒工場の支配人に向けて、夫の健康が優れないことを心配しながら、よく治療するようにと念を押した。

その前日、江界(カンゲ)ぶどう酒工場を現地で指導していた国防委員長は、支配人と話し合いながら夫が健康上の理由で退職していることを耳にした。

国防委員長は顔に笑みを浮かべて、夫が酒好きのようだねと言い、酒をたくさん飲むのは健康に悪いと諄々と諭した。

それなのに、この日もそのことを忘れず、彼女にもう一度念を押したのだった。

彼女への恩情はその後も続いた。

2007年5月、江界ぶどう酒工場を再び訪れて支配人に会った国防委員長は、ぶどう酒の支配人だね、元気で仕

事に励んでいるのか、とやさしく尋ねた。

そして、一幹部から彼女の活動状況について報告を受けて大いに満足し、高く評価した。

酒の貯蔵庫を見て回るときだった。国防委員長はなにげなく、かつて江界は美人の多いことで知られ、キーセンもかなりいた、今は道党責任書記と呼んでいるが、あのときは道知事と言われた、道知事がキーセンにおぼれていたそうだが、道党責任書記もこの宝の蔵、酒樽におぼれて慈江道を離れられないのではないか、と笑いながら言った。

随員たちはみんなどっと笑った。

このとき女性支配人がすかさず、そうではありません、うちの道党責任書記は酒が飲めません、本当です、とあわてて答えた。

すると国防委員長は、もちろん分かっている、と楽しげに言い、豪快に笑った。

国防委員長が自分の活動成果にそれほど満足して冗談を言ったことに気づいた彼女は、気後れするふうもなくぷっと吹き出してしまった。

それを見て、随員たちもまたからからと笑った。

肉盛りチェンバン冷麺

1999年11月のある日。

幹部たちと席を共にした金正日国防委員長は、公共給食部門で人民に民族料理を上手に作って提供する課題を与える途中、ふと、オブクチェンバン麺を話題に乗せた。

彼らはみな驚いた。

それもそのはず、オブクチェンバン麺とは、1頭の牛からいくらしか得られないオブク肉（牛の肋骨の下部の腹部にある柔らかな味の良い肉）を具にしたチェンバン麺（盆のような鉢に盛りつけた麺）であるが、昔、宮中で王族だけが食べたという食物であった。

国の経済状態がいまなお困難なときに、オブクチェンバン麺を人民に給食させるというのは、全く考えていなかったことである。

国防委員長は、そうした幹部たちの気持ちを察したかのように、オブク肉の代わりに鶏肉をもってチェンバン麺を作るのが良かろう、玉流館で鶏肉を具にしてオブクチェンバン麺のようにチェンバン麺をこしらえて人

民にサービスすべきだ、鶏肉をもって作ったチェンバン麺に、肉盛りチェンバン冷麺という名をつけてサービスすれば、人民が喜ぶだろう、と言った。

そして、党が鶏肉問題を解決することを決心し、近代的な養鶏工場を多く建設するようにしたので、それらの工場で生産される鶏肉をもってチェンバン麺を作って人民に供することができると言った。

国防委員長は、幹部たちを見回しながら、新しく建設する養鶏工場の鶏は大きいので、1羽で何人前の肉盛りチェンバン冷麺を作れるはずだ、肉盛りチェンバン冷麺には肉をたくさん盛るべきだ、と言った。

そして、私が言った通りに肉盛りチェンバン冷麺をうまく作って当該部門の幹部と玉流館の幹部に試食させてから、玉流館でその通りに作って人民に出すべきである、肉盛りチェンバン冷麺は初めから質が保障されなければならない、と強調した。

その後玉流館では、肉盛りチェンバン冷麺を誠意を込めて作って人民に出しはじめた。

主人公は加工者だ

2001年4月のある日、金正日国防委員長は某ヤギ牧場を現地指導した。

牧場を全部見て回った国防委員長は、出発を前にして、記念写真を撮ろうと言い、どこで撮るのがよいのかと尋ねた。

幹部たちがすぐ答えずにもじもじすると、国防委員長は、「乳加工室」という看板の下の階段を指しながら、「ここがよさそうだ。ここで撮ろう」と言った。

牧場の幹部たちが国防委員長の両側に並ぶと、国防委員長は後ろに目を向け、「娘たちが見えないんだ」と言った。

乳加工室に立ち寄ったときに作業中だった若い女性加工者たちを念頭に置いた言葉だった。

ある幹部があわてて答えた。

「彼女たちは加工室の中で作業中なので……」

すると、国防委員長は彼の背を軽く押した。

「早く呼んできなさい。一緒に撮らなくちゃ」

一人の幹部が加工室の中に入った。

記念写真を撮ろうとして国防委員長の周りに集まっている幹部たちを、加工室の中から羨ましげに眺めていた彼女たちは、すぐに飛び出してきて幹部たちの横に立った。

「そこに立たないでこっちに来るんだ。主人公は加工者たちだ」

国防委員長が手を振って呼ぶのであった。

彼女たちは、国防委員長のそばに立ち並び、国防委員長の腕をしっかり取って記念写真を撮った。

270日間飼った鶏

2001年12月、金正日国防委員長が江界養鶏工場を訪れたときのこと。

辺りの山々と建物の配置状況をしばらく眺めていた国防委員長は、「工場の位置を奥まった谷間に定めましたが、うってつけの場所です。……周囲の景色も美しいので、あたかも保養所に来たような感じがします」と満足げに言った。

肥育職場の第1号棟を見て外に出ていた国防委員長は、他の鶏よりことに大きな鶏に目を凝らし、それらが何キロあるのか量ってみるようにと言った。

そして、満足した表情で、量っている鶏を指しながら、どれくらいなのかと尋ねた。

7.8キロだという答えを聞いた国防委員長は、秤の目盛りを見ながら、本当に7.8キロもある、あの鶏の足はまるでワシの足のようだ、と楽しく笑った。

このとき、道の責任幹部が、国防委員長に見てもらおうと思って、工場で孵化したばかりのひなを今まで育てたが、あるものは9キロもあると言った。

実は、国防委員長が贈った種卵からひなが孵りはじめると、国防委員長を工場に迎えてそのひなを見せたがる従業員の気持ちは一層募った。ところが、あのとき国防委員長はロシアへの歴史的な訪問中だったので、彼らの願いはかなえられなかった。

外国訪問の道で当工場の実態を確かめた国防委員長は、代表団員の道党責任幹部を帰国させて、生産された肉と卵を8月15日以前に人民に供給するようにと指示した。

国防委員長の恩情に接するたびに、国防委員長を待ち焦がれる工場従業員の切なる思いは募るばかりだった。

それで工場では、人民に供給して余った数十羽の鶏をつぶさずに270日間も飼いながら、国防委員長の来る日を待ちに待ったのである。

しばらく黙っていた国防委員長は、幹部たちを見回しながらこう言った。

「江界養鶏工場の幹部と従業員が私に見てもらおうとして、工場で初めて孵化させたひなをこれまで270日間も飼育し、体重を9キロ以上にしたとのことですが、殊勝なことです。深く感動させられました」

持ち帰った乾しょう油袋

2003年7月のある日、江界基礎食品工場を訪れた金正日国防委員長は、各生産工程を見て回りながら、人民の食生活の改善に寄与するために奮闘している労働者たちの成果を高く評価した。

ついで、各種の製品サンプルが陳列されている場所に至った国防委員長は、乾しょう油の前で歩みを止めた。

ビニール袋に入れた乾しょう油の商標や包装に目を凝らしていた国防委員長は、何倍の水に割って利用するのかと尋ねた。

「10倍の水に割ります」

一幹部の答えを聞いてたいそう満足した国防委員長は、随員たちにそれを一つ持って帰ろうと言った。

工場の幹部が別途に包装すると言うと、国防委員長は、特別に作ったものではなく、人民に供給されるものを食べてみたいと言った。

その言葉に幹部たちは、いつも人民の生活向上に心を砕く国防委員長の労苦に今さらのように深く感動した。

一緒に雨に打たれながら

2004年4月、人民軍のある部隊を視察していた金正日国防委員長が、軍人たちの戦闘訓練を見るときのことである。

部隊の指揮官と共に新しくつくった訓練場の監視台に上がった国防委員長は、管下区分隊別に行われるさまざまな訓練の様子を眺めながら、終始満足の笑みを絶やさなかった。

訓練がたけなわになったとき、にわかに空が暗くな

り、雨がぱらぱら降りはじめた。
　幸いなことに、国防委員長は監視台に上がっていたので、幹部たちは降り出す雨は気にもせずに安心し、ただ軍人たちの訓練がうまくいくことばかり望んでいた。
　ところが、国防委員長は「雨が降りますね。監視台の外に出て訓練を見ることにしよう。軍人たちが冷たい雨に打たれながら訓練しているのに、われわれが監視台の中でそれを見るわけにはいきません」と言うのだった。
　幹部たちが強く引き止めると、国防委員長は重ねて強調した。
「私の健康を思うあなたたちの気持ちはよく分かります。しかし、軍人たちが雨に打たれながら訓練するときには、最高司令官も一緒に雨に濡れなければなりません」
　そして、欄干の前に立って長いこと冷たい雨に打たれながら、軍人たちの訓練を終わりまで見て褒めたたえた。
「軍人たちが訓練をよくやっています」

満足した訳

　2006年2月のある日、金正日国防委員長が興州（フンジュ）養鶏工場を訪れたときのこと。

感謝はすなわち頼み

　この日、改築された養鶏工場の産卵鶏棟に入った国防委員長は、まるで滝のように流れ出る卵を眺めながら、大いに満足した。
　工場の一幹部が、鶏肉や鶏卵を受け取った江界市民は私たちに感謝していますが、もともと金正日将軍が受けるべき感謝なのに私たちが受けて本当に申し訳ありません、と言った。
　国防委員長は、それはあなたたちが仕事を立派にしたからだとし、工場の幹部たちを褒めたたえた。
　彼らは恐縮し、身に余るお言葉です、とあわてて答えた。
　すると、国防委員長はこう言った。
「あなたたちは、江界市民からの感謝を今後も仕事

に頑張ってくれという頼みとして受け入れなければなりません」

国防委員長は、その感謝は自身が受けるべきものだというが、江界市民が人民のために働くあなたたちに感謝するのは当然のことだと言った。

入ってはならない場所

産卵鶏1号棟に入った金正日国防委員長は、鶏の数や卵の一日生産量を確かめて、ふと、この工場には鶏の病気が流行っていないのかと尋ねた。

世界的に激しく伝播して家禽業を脅かしている鳥インフルエンザを念頭に置いた質問だった。

工場の幹部がまだ入っていないと答えると、国防委員長は、それなら衛生防疫に力を入れているようだと言った。

そして、実はわれわれもここに入ってはいけないとして歩みを止めた国防委員長は、早く出ていこうと随員たちを促し、自ら真っ先に集卵室の方に戻ってきた。

入ってもかまわないと言う工場幹部に、国防委員長は、「養鶏工場では、衛生防疫の改善に優先的な関心を払わなければなりません。養鶏工場には誰も出入りさせてはいけません」と強調した。

このとき、産卵鶏棟の箱型鶏小屋から抜け出した1羽の鶏が床に下りていた。国防委員長は、産卵鶏棟を全部見て回れなくて残念がる随員たちの気持ちをほぐすかのように、鶏が勝手に出て回るのをみると、鶏も自由主義を犯すらしいと、呵々大笑した。

瞬間、産卵鶏棟が割れんばかりの爆笑が起こった。

改築された麻田遊園地

工業都市—咸興にある麻田(マジョン)遊園地は、朝鮮東海の名勝である。

1960年代の中頃、金日成主席は松林が茂り砂浜が広々とした海岸に咸興の労働者階級のための遊園地を建設するように位置を定め、数回にわたって現地に出向いて海水浴施設と食堂、休養閣などを立派に整えるよう導いた。

それ以来、この遊園地では休息の一時を楽しむ勤労者の笑い声が、夏季はもちろん四季を通じて絶えなかった。

しかし、1990年代中頃に始まった「苦難の行軍」のた

め、ここを訪れる人が少なくなり、笑い声もだんだん聞こえなくなった。

そうした2006年11月、咸鏡南道に対する現地指導を続けていた金正日国防委員長は、麻田遊園地の実態を詳しく確かめ、幹部たちに次のように言った。

「麻田遊園地をよく整備し、労働者たちが広く利用するようにしなければなりません。社会主義は労働者階級の世であるのに、労働党時代に労働者のために遊園地一つも立派に整えられないというのは話にならないのです」

国防委員長は、語を継いだ。

——咸興市は、多くの労働者が密集している大きな工業都市である。咸興市には解放前から労働者が多く住んでいたが、当時は彼らが利用できるまともな憩いの場もなく、遊園地などは考えすらできなかった。労働党時代に、咸興市のような大きな工業都市に労働者のための遊園地を遜色なく立派に整えなければならない。私が咸興市を特別に重視しているのも、労働者が大勢暮らしている都市だからである。……

咸興市内の労働者をはじめとする市民が麻田遊園地をよく利用しているだけに、その地区の建物を改

築・補修すべきである。麻田地区にある諸建築の照明と暖房に必要な電力問題も解決しなければならない。麻田地区を労働者のための文化的な憩いの場として立派に整えるためには、国家的に投資すべきである。国の財政事情がいくら厳しいといっても、労働者階級のためには資金を惜しんではならない。そうして、労働党時代にわが党が労働者階級のために、人民の福祉の向上のために麻田地区に総合的な憩いの場を立派に整えたと、遠い将来にも次世代が言えるようにすべきである。……

その後、麻田遊園地にはホテルが新しく建設され、既存の建物が改築され、人造湖や緑林、花壇などがさらに素晴らしくつくられるようになった。

風光明媚の麻田遊園地は、訪れる勤労者であふれ、至る所に笑いの海が広げられるようになった。

人民の幸福のために

編　集：安鉄鋼
翻　訳：金光哲
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発行日：2025年8月

ㄱ－ 250880351983

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

ISBN 978-9946-0-2461-5